

学校現場における熱中症に関する知識・意識について

－熱中症予防への教育的アプローチの検討－

松尾 浩希（奈良教育大学大学院）

1. 目的

熱中症は、適切な予防措置を講ずれば防げるものだとされる。しかし、学校の管理下における熱中症死亡事故は毎年のように発生しており、熱中症発生件数に至っては、近年では毎年約4,000件報告されている。熱中症の発生を限りなく“ゼロ”に近づけるためにも、現状の熱中症予防に加えて、新たな教育的な取組が必要であると考えられる。そこで本研究は、学校現場における熱中症予防に効果的である教育方法を検討することを目的とした。

2. 研究方法

- 1) 対象：A 市立 A 中学校の生徒 199 名の内、体育的部活動に所属する（女子ソフトボール部 9 名、女子バレーボール部 29 名、男子バスケットボール部 31 名）計 69 名をワークショップに参加した WS あり群、それ以外 130 名を WS なし群
- 2) 調査方法：無記名自記式質問紙調査（研修会前、研修会直後、研修会 3 ヶ月後）
- 3) 調査内容：熱中症に関する知識・意識（熱中症の学習経験、運動時における温度・湿度の確認、暑さ指数 (WBGT) の認知率・利用率、運動時における水分・塩分の準備、運動時における衣服）
- 4) 調査時期：2017 年 6 月 12 日～2017 年 10 月 31 日
- 5) 分析：単純集計、クロス集計、カイ二乗検定
本研究では、熱中症予防研修会（以下、研修会）を実施後、主体的・対話的で深い学びの視点からの教育的介入として KJ 法を用いたグループディスカッションをワークショップ内で 2 回実施した。

3. 結果および考察

1) 暑さ指数 (WBGT) の認知率 (図 1)

「はい」とした回答率は、研修会直後に向上し、研修会 3 ヶ月後 WS あり群において有

意に向上した。一方、WS なし群では研修会直後に比べ低下傾向であった。

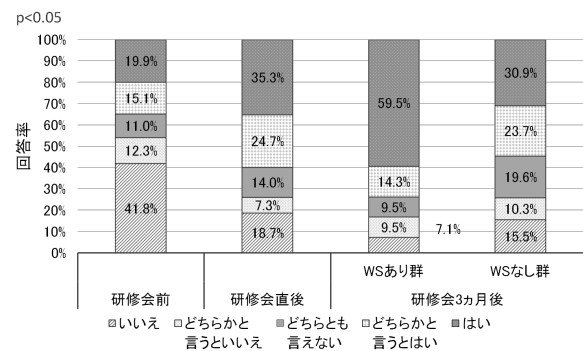


図 1 暑さ指数 (WBGT) の認知率

2) 暑さ指数 (WBGT) の利用率 (図 2)

「はい」とした回答率は、研修会直後に有意に向上し、研修会 3 ヶ月後 WS あり群においても有意に向上した。一方、WS なし群では研修会直後に比べ低下傾向であった。

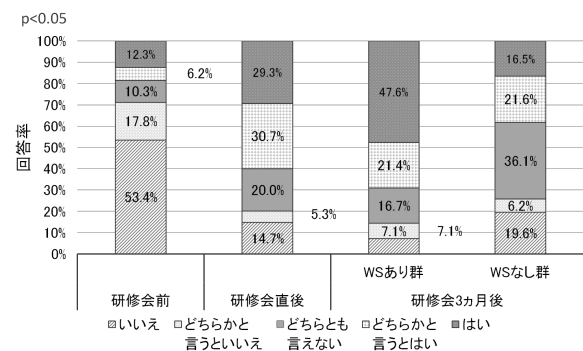


図 2 暑さ指数 (WBGT) の利用率

4. 結論

熱中症予防の取組として、研修会は熱中症予防に関する知識・意識を高めることに一定の効果を示すが、研修会だけでは一時的な効果にとどまることが示唆された。

主体的・対話的で深い学びの視点からの教育的介入を加えることは、熱中症予防に有用であることが示唆された。